

NIEニュース

エヌ・アイ・イー



Newspaper in Education

第91号
2018.7.15

●特集・地域を担う人材育成とNIE▶1~3 ●「特別の教科 道徳」とNIE▶4~5 ●新聞の「今」——オリ・パラで何を伝えるか/NIEフラッシュニュース▶6 ●アドバイザー紹介/いっしょに読もう!新聞コンクール募集▶7 ●〈NIEでいきいき〉〈NIEあれこれ〉▶8

©2018年 日本新聞協会

編集・発行 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル [https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集

地域を担う人材育成とNIE

子供たちがこれからの変化の激しい社会を生きていく上で必要なことは何か。その一つに、身近な地域や社会とのつながりの中で学びながら、自らの人生や社会をよりよく変えていくことができるという実感を持たせることが挙げられるだろう。東日本大震災からの復興など、地域のさまざまな課題と向き合いながら学び、未来を考へることは、子供たちが自らの人生を切り拓く力を育むことにもつながる。地域を担うとはどういうことか、新聞は子供たちと地域のつながりにどのような役割が果たせるのか、それぞれの立場で考察いただいた。

地域を担う人材の基本的条件

第23回NIE全国大会盛岡大会は、大会スローガン「新聞と歩む 復興、未来へ」を掲げて7月26、27の2日間、盛岡市などで開かれる。東日本大震災後、被災3県（岩手県、宮城県、福島県）では、初の開催である。大会テーマと「被災3県では被災後初」という条件と鑑み、本特集「地域を担う人材育成とNIE」を、東日本大震災、それも岩手県の場合を具体例として論ずることにしたい。

「地域を担う人材」の基本的条件は何か。誌面の都合から、端的に言おう。「具体的体験を通して、地域を愛することと誇りを持つこと」である。

つまり、「地域を担う」と言っても単なる理念を越えて、「体験」となつてこそ生命を持つのである。

「東日本大震災」での行動

「東日本大震災」の行動は、前段の基本的条件を満たしているか。

以下のように条件を満たしているのである。東日本大震災時の、東北の一般の方々や児童生徒（小学校・高校）の行動は、どうであったか。周知のように、千年に一度という指摘もある大災害に対して、巨視的には、沈着に力を合わせて行動したのである。また、児童生徒も当日およびその後の復興への困難な日々を奮闘したのである。学校管理の児童生徒に一人も犠牲者がでなかった「岩手の奇跡」はその象徴である。しかも、この奮闘は、他の地域や海外の方からの支援という体験にも恵まれたのである。

この奮闘を通して、先生方も児童生徒も、「地域を担う」とは、どういうことを深く体験したのである。こうした奮闘・体験を通じて「地域を担う人材」という意識が強くなったのである。今回のNIE全国大会では、被害が大きかった沿岸部

の大槌町で特別分科会も開かれる。大槌町に関しては、筆者にも「被災の町の学校再開——大槌町駐在指導主事の証言」（岩手復興書店、2015）の聞き書きがある。参照していただければ幸いである。

新聞界への期待と希望としてのNIE

「宗教は、歴史的に、マイナスの加速度を担っている」（岸本英夫「宗教学」大明堂、1961）に倣うならば、「活字文化」もまた「負の加速度を担っている」と言える。

新聞は、メディアリテラシー的観点からすると、メディアの重要な一角を占めるわけであるが、それは、フェイスブックやツイッターなどのソーシャルメディアからの攻勢を受けてもいる。

しかし、新聞は、多くの読者に開かれている点で、「活字文化」の先兵となり得る条件を有している。「新聞界」と「教育界」という異文化にまたがるNIEへの期待は大きいのである。



岩手県NIE協議会会長
岩手大学名誉教授
NIE全国大会盛岡大会実行委員長

望月 善次

「ふるさと科」で育む 地域への思いとNIE



大槌町立大槌学園
教諭
武田 啓佑

2016年度に義務教育学校としてスタートした大槌学園のある岩手県大槌町では、東日本大震災での津波による被災以後、「ふるさとを創り、ふるさとに

生きる子どもの育成」を目指し、義務教育9年間を通した横断的カリキュラム「ふるさと科」が創設された。学習指導要領の各教科や領域などの枠組みにとられない学習活動の充実を目指し、一人一人の「生き方」の指導が基盤となっている。

また、地域の復興と未来の人材育成へ向け、地域ぐるみで教育を推進することが重要施策となっており、そうした点からも「ふるさと科」は教育課程の中で大きな柱となっている。「地域への愛着」「生き方・進路指導」「防災教育」が三つの柱と

なっており、各学年において発達段階に応じたカリキュラムが構成されている。「ふるさと科」では、大槌のサケについての学習や特産品販売などを行ってきたが、事前・事後指導に新聞を活用している。こうしたNIE活動が、いかに「ふるさと科」の学びを深めてきたか。ここでは3点挙げたい。

1点目は、地域と学校のつながりを深める機会が増えたことである。生徒たちは「ふるさと科」を通じて、地域の人たちと関わる機会が多く、恵まれた環境にある。これに加え、新聞記事の活用で、今自分たちの町で何が起きているのか、地域の人たちがどんなことを考えて復興に携わっているのかをリアルタイムで理解でき、直接体験との相乗効果に寄与している。

2点目は、「ふるさと科」での学びをメタ認知できることである。盛岡市での特産品販売活動や地元の特産品である新巻き

サケ作りなどの際に新聞で取り上げていただき、自分たちの活動の意義を確認したり、仲間の意見をあらためて聞いたりする機会にもつながった。加えて、自分たちの活動が発信されることで、やりがいを感じる事ができた。

3点目は、「自分ごと」として主体的に考え判断し、実践する場が生まれたことである。全国ニュースであれば、多くの生

新聞でさらに高める 地域防災への意識



新潟県聖籠町立聖籠中学校
教諭
菅谷 啓子

1年生の総合的な学習の時間の中で、新聞記事を活用して地域防災を考える実践を全5時間で行った。単元のねらいは「洪水に関する基本的な知識や災害発生時の対応方法を学び、その実践を促すとともに、想定にと

らわれることなく、自ら判断し

徒は、その事実との距離を感じ、どこか他人ごとと捉えていた。しかし身近な話題を新聞記事から考えることで、切実さが生まれ、生徒が当事者意識をもつことができた。こうした学習を継続的に行うことで、単なる体験学習ではなく、「自分にも社会の一員としてできることはないか」「社会の一員としてどのように生きるべきか」といった視点をもって学習に取り組むこと

て安全確保を図ることができる。生き抜く力を養う」である。

1・2時間目は、洪水が起これるしくみや危険性、避難時の行動を学習した。3時間目は、日本赤十字社の方を講師に招き、災害時の様子や赤十字社の活動などに関する講演を聞いた。その中で、生徒は「災害はいつ起こるか分からない。起きたらまず自分の命を守ること、次に家族をはじめ近くにいる人を守ること」を学んだ。近くに

いる人

ができた。

本校では、「ふるさと科」以外にも、毎週金曜日の朝活動の時間を「NIEタイム」として、新聞社が作成したワークシートに取り組んだり、各教科の学習に取り入れたりするなど工夫しながら実践を行っている。こうした9学年の実践をさらに系統的・発展的に関連づけ、子供の「生き方」にNIE活動を結びつけていきたい。

を守った一つの例として「釜石の奇跡」の話も聞いた。

これを受けて、4時間目に、1967年8月に身近な地域で起こった羽越水害を題材として取り上げ、地域防災のために自分たちができることを考える授業を行った。身近とはいえ発生から50年がたっているため、事前のアンケートではこの水害を知っている生徒は38%であった。そこで、地元新聞の子供向け特集記事で、小学6年生が羽越水害についてレポートした記事

を導人に使った。生徒はレポートした児童の思

特集 地域を担う人材育成とNIE

地域の将来を考える
「子ども記者」の取り組み



山陽新聞社
読者局NIE推進部長
瀬尾 由紀子

山陽新聞社では毎年、春と夏に「山陽子ども記者」を企画している。取材をして記事を書くのは、小学5年から中学1年までの子供たち。取材同行から原稿指導までNIE推進部の記者がサポートし、仕上がった記事を取りまとめて「山陽子ども新聞」(プランケット判、4ページ)を発行している。

子供たちに新聞に親しんでも

いが書いてある部分に線を引き、「災害はこれからも起こるかもしれない」 「自分たちにできることを考えたいと思います」と記された部分から、「命を守ることも含めて、洪水災害時に自分たち中学生にできることは何か」を学習課題に設定した。まず、個人で考えてから班に

なり、①地域住民としてできること、②避難所でできることーの二つについて意見を出し合った。①については「小さい子やお年寄りは困っていたら優先的に避難できるようにする」、②は「一人の人がいたら声を掛けたい」などの意見が出た。班の考えを発表した後に「最

優先は自分の命を守ること」と強調した上で、避難の際には声を掛けあうこと、避難所では小さい子やお年寄りの話し相手になるなど自分たちにできることをまとめた。最後に、2014年8月に土砂災害があった広島市で、2人の小中学生が避難所で壁新聞を発行したという新聞

記事を示し、できることを頑張った小中学生がいたことを紹介した。振り返りでは、生徒から「新聞記事を読んで改めて水害の怖さが分かった。もし水害が起きたら一人でも多くの人が助かるようにフォローしたい」「もしものことがあったら協力できる

地域でないといけない。それには日頃からあいさつが大事だと思った」などの感想が出た。朝活動や授業で生徒に身近な記事の活用を図ったことで、地域や社会で起きている出来事に関心があると答える生徒の割合が全校で8割を超え、新聞活用の成果が見られた。

らおうと2001年にスタートした。これまでに、千人近い子ども記者が誕生。記者体験を通して社会を学び、大きく成長している。

今春、子ども記者を体験したばかりの小学生2人を紹介しよう。

岡山市立加茂小6年の梶田 南さん。新聞は身近な存在で、

記事を読んで親子で話し合うことも多いという。子ども記者に応募したのも、山陽新聞で紹介されたイラストレーターの仕事に興味を持ったからだだった。

3月には東京で開かれた「こ

ども新聞サミット」に参加。全国から集まった小学生たちと一緒に、「ふるさとアピール隊」として地域を盛り上げる方法などについて議論した。

「岡山の魅力をもっと多くの人に知ってもらいたい」と、岡山を代表する観光地・吉備路で、桃太郎伝説の鬼神「温羅」について取材、自ら作った「吉備路新聞」を紹介しながら魅力をアピールした。

地元の総社市役所、岡山西商工会、吉備路ボランティア協会に取材に向いた梶田さん。「地域の魅力が再発見できた。いろんな人の話を聞いて視野が広がった」と笑顔で話していた。

もう一人の子ども記者は、総



子ども記者の活動の様子

社市立総社東小6年の秋山花鈴さん。「おかやま新聞コンクール」(岡山県、岡山県教委、岡山市、岡山市教委、山陽新聞社主催)の新聞づくりの部で、小学生の最優秀賞に当たる山陽新聞社長賞を3年連続で受賞した。高齢者の交通手段となっている総社市の「予約型乗り合いタクシー

」をテーマにするなど、地域に目を向けた新聞づくりに挑んできた。

秋山さんの家では、父親が食卓で新聞を広げて読むのが習慣。家族で取り囲んだり、記事について盛り上がりたりするのが日常的な風景という。「新聞に親しむうち、伝え方や文章の書き方が年々レベルアップしてきた」と話してくれた。

「新聞は、社会と自分をつなぐ大切な存在」。記者体験をした子供たちから、よく聞かれる言葉である。岡山を拠点とする地方紙として、地域社会に目を向け、地域の将来が考えられる子供が育つよう、これからも役割を果たしていきたい。

「特別の教科 道徳」とNIE

小学校で今年度から、中学校で2019年度から「特別の教科道徳」が始まる。教科化にあたってのキーワードは、「考え、議論する道徳」。以前から道徳の時間で活用されてきた新聞は、「考え、議論する道徳」を実現する上で、どのような役割を果たし得るのか。校長経験のある新聞社NIEコーディネーターの論考、小中学校での実践報告から考察する。

新聞を活用した「考える道徳」「議論する道徳」とは



福井新聞社
NIEコーディネーター
徳島 泰彦

今回の学習指導要領改訂では、児童生徒が多様な感じ方や考えに接する中で、考えを深め、判断し、表現する力などを育む「考える道徳」や「言語活動の充実」が具体的に示されている。さらに「多様な教材の活用」に努めることが追加され、より多面的・多角的な視点で、社会と結びつく教材が必要となる。新聞は、その趣旨を生かし、思考力・判断力・表現力を高める

最適な教材である。

また、改訂では、「一つの内容項目を複数の時間で扱う指導の工夫」が追加され、各教科等との関連も考慮した指導計画を作成するとしている。

一例として、社会科の学習で、社会のさまざまな基本的人権について理解を深めながら、道徳の学習で新聞に掲載されている人権に関する記事を用いて、身近な言動や差別について考え、話し合う中で、より社会とつながる学びを構築することが挙げられる。

福井県内では、すでにこのような趣旨で新聞を活用した道徳

の授業が各学校で展開されている。勝山市立村岡小学校では、「自律的で責任ある行動」を主題に、6年生で「君たちは最愛の人を奪った。でも憎まない」（福井新聞2015年11月21日付）の記事を資料とした授業が行われた（写真）。

この授業では、15年に起きたパリの同時多発テロの際、フランス人ジャーナリストのアントワヌ・レリスさんがSNS上にも「君たちは最愛の人を奪った。でも憎まない」と投稿したこと、レリスさんはこのテロの被害者家族の一人であるが、「テロには屈さない」「憎しみに怒りで返しても何も解決しない」と



発信した。

授業は、最初にテロについて理解させ、テロに対しての思いを共有させてからレリスさんの状況や心の内に迫りながら、自律的に判断することの意味やその大切さについて考えたり、責任ある行動につなげたりして展開されていた。

主発問の「憎まない」と発信したことについて、「共感できるか」「納得できないか」を判断させ、児童たちは、「相手のことが許せない」「憎しみは何も生まれない」「テロリストと同じ立場にはなりたくない」など、真剣に考え、思いを伝え合っていた。

担任の木下智仁教諭は「この記事は、人として行うべきことや、社会通念として行ってはならないことを区別したり、判断したりする力を身につけさせる重要な資料。この授業を通して、正しいと判断したことは自信を持って行い、正しくないと判断したことは行わないようにする態度を育てたい」と述べる。

授業後は、「行事などでは自

主的に活動したり、物事を進める際には自分を律したりするような姿が見られるようになった。最も大きな変容は、学級全体に自らを律する雰囲気広がりが、節度が自然に生まれてきたこと」と言う。

福井市成和中学校2年では、「思いやりの心」や「差別や偏見のない社会の実現」などの主題で授業が行われ、身近な記事を通して、「自分たちに提示されている問題は何なのだろう」「わたしたちは何ができるのか、何をすべきだろうか」など、社会の一員として、多面的、多角的に議論を深めた。生徒たちは、「いろいろな人が住みやすい社会になるには」「いろいろなボランティアに参加してみたい」など、自分ができるとは何かを考え、これからの行動につなげようとしていた。

このような新聞を活用した授業は、児童生徒が世の中で起きている出来事を知る機会にもなる。社会的課題を身近に捉え、共有することで、より深く考え、議論が広がる学びとなっている。

「特別の教科 道徳」とNIE

実践報告

タイムリーな記事で意欲を高める



横須賀市立武山小学校
教諭
臼井 淑子

「世界から見たら、ぼくたちが当たり前に思っていたマナーを守るところや礼儀正しさも日本のよさなのだ。それを外国の人に教えてもらって、うれしかった」「日本のよさを他の国の人たちが認めてくれただけでなく、見習ってくれて日本人としてうれしい。授業後のノートには、5年生らしい素直な驚きと喜び、そして誇りがつづられた。5月、「日本人の心」(関連する内容項目C「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」と題して、新聞記事を教材に道徳の授業を行った。使用した記事は、「羽生パレード 10万人超祝福」(神奈川新聞2018年4月23日付)と「羽生パレードごみなし」(同24日付)である。導入での「日本のよいとこ

ろ」についての自由発表では、予想通り、平和や自然、歴史、和食が列挙された。そこで、平昌冬季五輪男子フィギュアスケートで五輪2連覇を達成した羽生結弦選手の仙台市でのパレードで、ゴミがとでも少なかったことを報じた記事を提示した。なぜゴミが少なかったのか。フアンのマナーのよさにつづる。ゴミに関する報道としては、14年サッカーワールドカップブラジル大会での「サポーターたちのゴミ拾い」が思い出される。そこで、当時の新聞記事やSNSで拡散した海外の称賛のツイートを次々と提示した。「人には公共の場を清潔に保ちたい、他人の迷惑になることはしたくない、などの美しい心があること。実際に活動する人の姿に感動するだけでなく、自分にもその心があることを自覚し、実践したいと思う気持ちを促した」というねらいで進めた授業は、「外国の人もいい人

であふれている」という国際理解の意識も高まることとなった。最年少で国民栄誉賞を受賞した羽生選手。記事を利用して、彼の生き方からも学ばせたい。道徳でのNIE初体験だった

実践報告

道徳で効果的な新聞活用を模索



南九州市立川辺中学校
教諭
東 まどか

共同授業者が授業後、「新聞活用で、タイムリーに子供たちと感動を共有でき、関心や意欲を高められた。教育的効果が高まると実感した」と感想を寄せてくれたことがうれしい。

せにくかったりする。週1回の道徳の授業。これまで新聞記事を活用して議論させたこともあ

1年間の道徳の振り返りをテーマに作成した「はがき新聞」では、この授業を取り上げた生徒がいた。「はがき新聞」は、生徒が自分を見つめ、他者の考えに触れる機会となるだけでなく、次年度から始まる道徳の教科化における評価をどのように行うのか、どのような授業が生徒の心に残ったのか、道徳における発問とはどうあるべきかなど、教師に還元されるものが多いと感じている。この取り組みは今年度も継続していく予定だ。今年度は、教室の中にもNIEコーナーを設けた。

道徳こそ、NIEの取り組みを模索するうってつけの舞台だと思っている。NIE担当者として、まずは自身のスキルアップを図り、多くの職員とともに「学びあい伝え合う生徒」を育てていきたい。



新聞の「心」

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、「オリ・パラ教育」に注目が集まっている。オリ・パラを通じて、これからの時代を生きる子供たちに考えてほしいこと、身につけてほしい知識・態度とはどのようなものなのか。オリ・パラ報道に携わる新聞記者の立場から、新聞記事を活用した教育の可能性を交えて、「寄稿いただいた」。

オリ・パラで何を伝えるか —新聞に詰まる多様な視座



東京本
社委員
東京新聞
社会部
編集長
石元 悠生

をそのまま五輪教育と位置づけるなど、いまだ手探り状態の学校も多い。

2020年東京オリンピック・パラリンピックまで2年弱となり、教育現場でオリ・パラの理念や参加国の歴史を学ぶ動きが活発化してきた。しかし、

学校によって取り組み姿勢に温度差があるのも事実だ。大切なことは何を催したのかではなく、何を伝えたかではないか。

東京都教育委員会では都内の全公立校で「五輪教育」を展開する。アスリートとの交流や地域で伝統文化体験などを実施するが、中には体育や地理の学習

ことで、身近にある「いじめ問題」を生徒が考える契機になる、と同校の教頭は説明した。

長野のように学校や地域による一体的な取り組みがある一方で、日常の中で教員個人による五輪教育の実践も十分可能といえる。

取材で出会った公立高校の男性校長は「国語の授業で那須与一が扇の的を射抜き、平家も源氏も喝采したことを題材に、こんなトップアスリートがいたこと、相手への敬意についても学ぶことができる」と話した。

この校長が考える五輪教育の狙いは、単に知識を学ぶのでなく「人を育てる」ということだ。算数や数学の授業で砲丸投げを例に力の分解を、人類史上最速のウサイン・ボルトの世界記録から時速を導き出す。美術でオリンピックアの遺跡から建築様式を考える。五輪教育では「知る」「観る」「する」「支える」の四つのアクションが大切とも訴える。

こうした素材となるテーマは、過去の新聞報道から拾うこともできる。招致活動の象徴となっ

た桜をモチーフにした五輪カラーのリース（花輪）のエンブレムはなぜ誕生したのか。産経新聞では、東日本大震災からの復興を願ってロゴをデザインした作者の女子大生の思いを報じている。大会の開催決定を伝える記事からは、東京が激しい国際競争を勝ち抜いた要因を考察できるのではないかと。

五輪教育では、子供たちが社会貢献や他者を思いやる心の育

NIE フラッシュニュース

成、障害者への理解、日本人としての自覚などを学ぶことを理想とする。例えば、そうした内容に触れた新聞記事を伝えるだけでも意義があり、教育現場では先生自身が発する言葉の一つ一つが、実は子供たちの心や身体に感じるレガシー（遺産）となっていくのだ。オリ・パラをめぐる新聞報道には、そんな視座がたくさん詰まっていることも覚えていてほしい。

◆実践指定校に544校 新聞協会

の2018年度NIE実践指定校が544校で確定した。

◆NIE実践指定校は全国のNIE推進協議会からの推薦をもと

に新聞協会が認定する。実践期間は原則2年。指定校は、同校に配達可能な一般日刊紙を一定期間、無料で購読できる。購読料は、新聞協会と各新聞社が分担して負担する。また、新聞協会が認定する実践指定校とは別に、17都道府県のNIE推進協議会が独自認定校として計72校を

認定している。

◆高校の新学期指導要領案に意見書提出

高等学校の新学期指導要領が3月30日に告示された。小・中学校と同様、総則に「新聞」の記述が盛り込まれた。告示に先立ち、新聞協会は同12日、

言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力など学習の基盤となる生徒の資質・能力の育成に読書活動や新聞活用は欠かせないとして、解説書等で新聞の活用等に言及することなどを求める内容の意見書を文部科学省

あてに提出した。解説書は今夏に示される。

NIEアドバイザー紹介

(敬称略)

① 学校名 ② 担当教科 ③ NIE実践歴 ④ 新聞を活用するうえで工夫を一言

●北海道



飯田雄士 (いいた・ゆうじ)

① 別海町立野付中学校 ② 中

学校国語科・数学科、小学校③20年④新聞は「学力の三要素」を高める宝庫。新学習指導要領と関連付けながらその良さを伝え、各学校の実践を蓄積し、共有している。

●長野県



黒岩理恵子 (くろいわ・りえこ)

① 安曇野市立堀金中学校 ② 中

中学校国語科③13年④さまざまな場面で新聞を生きた教材として活用し、生徒たちの視野を広げ、思考力を高めたい。無理なく、楽しく、実践したい。

●北海道



佐藤雅輝 (さとう・まさき)

① 美瑛町立美馬牛中学校 ② 中

社会科③12年④「生きる力」を育む方法の一つとして、新聞は「生きた教材」となる。まず学校に新聞があつて、いつでも誰でも新聞を手にすることができる環境を整えることが大切と考える。

●愛知県



河村智美 (かわむら・ともみ)

① 刈谷市立朝日中学校 ② 中

会科③18年④新聞を活用すると子供たちの学習意欲が高まることを実感している。教材研究の一つとして欠かさず新聞を読み、活用の仕方を考える。

●長野県



中澤美和 (なかざわ・みか)

① 上田市立川西小学校 ② 小

学校、特別支援、英語③7年④新鮮で現実社会と教室をつなぐ新聞。接し、関わる環境づくりが大事。授業ではつきたい力を明確にして吟味・選別した記事を、ここぞという場面で活用する。

●新潟県



柳澤一輝 (やなぎさわ・かずてる)

① 上越市立城北中学校 ② 社

会科③5年④新聞は、事象に対し自分の意見を持ち、社会や人と主体的に関わっていくこと、自らの考えや判断をもとに他者と折り合いを付けることが可能となる有効なツールである。有効活用したい。

●福井県



駒野俊美 (こまの・としみ)

① 越前町立城崎小学校 ② 小

学校全科、社会科③5年④地域(県・町)のイベントや課題になっていく記事を活用して、児童生徒に自分が直面する問題として批判的に考えさせていくと授業が活性化した。

●三重県



武久隆弘 (たけひさ・たかひろ)

① 伊勢市立四郷小学校 ② 小

学校全科(授業・朝学習)③20年④「新聞は宝の山」であることをコンセプトにし、朝学習を中心に、児童と楽しみながら新聞の読み取りをしている。基本は5W1H。

●兵庫県



荒木浩輔 (あらか・こうすけ)

① 神戸市立山田中学校 ② 中

会科③1年④新聞を読まない子供にとって、活字だらけの新聞は難易度が高い。興味関心が持ちやすいテーマを選んで取り組むように心がけている。

●岡山県



高橋恵子 (たかはし・けいこ)

① 倉敷市立真備中学校 ② 国

語科③8年④社会の窓としての新聞に日常的に親しみ、思考力・判断力・表現力を育むことができる教材や授業づくりを心掛けている。

●高知県



梶原和美 (かじはら・かずみ)

① 香美市立山田小学校 ② 小

学校全科③6年④新聞は、教科書にはない長所を持った教材。自分の心が動いた記事を教材として使っている。特に投書は、子供の多様な考えを引き出す教材にぴったりである。

第9回「5C」読書コンクール

新聞コンクール 作品募集中!

新聞協会は、新聞を読んで気になった記事を選び、家族や友達と話し合った上で、感想や感じたことなどを記入して応募するコンクールの募集を開始しています。応募対象は、小・中・高校(高専)生で、締め切りは9月10日(月)必着です。募集要項など詳細はNIEサイト(<https://nie.jp/>)をご覧ください。同サイトには、印刷してご利用いただける応募用紙のデータのほか、新学習指導要領が目指す学びとコンクールの親和性について訴える広報ちらし(写真)のデータを掲載しています。夏休みの課題としても取り組んでいただきやすいコンクールです。多数のご応募をお待ちしています。





「NIEでいきいき」という

言葉で思い浮かぶのは、新聞を熱心に読みふけている生徒の姿である。新聞には高校生にとって興味深い記事が必ず載っている。それはスポーツ面や地域面であったり、ときには広告であつたりもしたが、テーマを決めた学習の中でも、生徒たちはちよつとした「道草」をととても楽しんでるように感じた。

昨年は国語の研究授業で「精神的な豊かさを考える『まわし読み新聞』」に取り組んだ。教科書本文で説明されている「精神的な豊かさ」を新聞記事で具

事務局長から一言

栗東高校は2017年度からNIE実践指定校となった。三木由美子先生を中心に、「まわし読み新聞」を活用した国語の

体化しようというものであるが、生徒たちは該当する記事を探して、その豊かさを言語化していた。それらは、「地域から世

滋賀県立栗東高等学校

教諭 三木 由美子

◎滋賀県栗東市／校長・西藤 仁／生徒数・704人

◎特色・1974年の開校以来、地域の期待と信頼に応え、社会に貢献できる人材の育成を目指して発展を続けてきた。開校時の普通科に加え、95年には県内唯一の美術科が併設され、現在に至る。西藤校長のもと、704人の生徒は日々の学習に加え、部活動や各種の展覧会、コンテストにおいて常に優秀な成績を収めるべく、日々励んでいる。



研究授業で熱心に新聞を読む生徒



新聞レポートリレー

「ノーベル賞（ICAN、カズオ・イシグロ）」の記事に注目する感性と同様に「新聞記事からいろいろなことを知り、考えることができる」など、発見することが多かったようである。昨年はこのほか、新聞レポートリレーや投書の取り組み、NIEコーナーの設置、講演会の実施等を通して、NIE活動の推進に努めた。レポートリレーの表紙は、美術科3年生の作品である。

「新聞は情報の窓口なんです」。昨年度初め、NIE実践指定校を紹介する場で、静岡県立静岡聴覚特別支援学校の担当教諭が語った抱負の中の一言だ。情報ツールに限られる聴覚障害のある子供たちにとって、情報を一覽できる新聞は学習素材として理想的と強調され恐縮した。◆それから1年。中学部で始まった新聞タイムは、手話を交えるなど進行はゆっくりだが、一般校と大きく違わない。大事なのは、関心を持つきっかけを提供すること。関心を持たなければ主体的に学ぶ姿勢も育たないと狙いは明確だ。だから「窓口」が重要なのだ。◆NIEを推進する側として、学校にノウハウを伝えることに傾注しがちだが、目的が定まれば手法はついてくる。各校の多様なNIEの考え方や実践を知り、新聞側が考えるより教育現場はずつと地に足がついていると学ばされている。



授業、新聞記者が講師を務める人権講演会、新聞の読み方講演会の開催など、1年間意欲的にさまざまな活動に取り組んだ。私も国語の研究授業に参加し、「まわし読み新聞」の作成におい

て、生徒の感性の豊かさ、みずみずしさに接することができた。NIEの活動で学校を訪れた記者たちは、社会に視野を広げるために新聞は有効な教材だということを確認し、生徒たちの真

剣なまなざしに、活力をもらって帰ってくる。今後も、県内の学校、先生たちを引っ張る活動を展開されることを期待している。（滋賀県NIE推進協議会事務局長・松田規久子）

（静岡新聞社・山田玲子）